

ローレンス・ティアニー、松村 正巳：著

ティアニー先生の診断入門 第2版

書評者

佐藤 泰吾（諏訪中央病院・内科総合診療部）



●大切なことは後から、わかる

私は2000年～2004年までの4年間に何度かティアニー先生とともに過ごす幸せに恵まれた。松村理司先生（現・洛和会音羽病院院長）が中心となって運営されていた、舞鶴市民病院での「大リーガー医」招聘プログラムでの経験だ。

『ティアニー先生の診断入門第2版』を読了した時、松村理司先生の声がよみがえってきた。「大リーガー医がホームランを打っているときに、何をポーっとしとるんや!」と、いら立ちとともに発せられた声である。

舞鶴市民病院における、ある日のケースカンファレンス。2年先輩が、ティアニー先生に症例提示。高齢男性で、細菌性髄膜炎の症例であった。症例のポイントは髄液から2種類のグラム陰性桿菌が検出されている点であった。「Great case! strongyloidiasis!」とティアニー先生はにこにこしながら答えられた。その瞬間のティアニー先生のしぐさは、しっかりと私の中に残っている。しかし卒後間もない私には、

2種類のグラム陰性桿菌が髄液中に検出されることが、なぜ問題になりうるのか理解できなかった。正直に言うところ、「strongyloidiasis」が何を意味するのかさえ知らなかった。私にはほとんど何もわからないまま、カンファレンスは終了した。ティアニー先生が部屋を出たあと、松村理司先生の前記発言。

『ティアニー先生の診断入門第2版』はとてもわかりやすい文章と構成で記述されている。ケーススタディーもティアニー先生の思考を丁寧になぞることができるよう作り上げられている。もちろん、長年にわたりティアニー先生とディスカッションを積み重ねてこられた、松村正巳先生の配慮が行き届いているが故。思考の補助線になるcolumnも魅力的だ。閑話からはティアニー先生のお人柄がとてもよくうかがえる。

「Great case! strongyloidiasis!」から、10年以上の時間がたった。臨床の時間を積み重ねる中で、わからないことを抱え続けることの大切さを教えられ

た。その場ですべてを理解できなくても、その時の風景、言葉、しぐさを記憶にとどめおくことが大事なのだ。結果として、いつも大切なことは後から、わかる。

今の私には、2種類のグラム陰性桿菌が髄液から検出されているときに、なぜ「糞線虫症」を考えなければいけないのか、理解できる。そのために、何を患者から聞き出し、どのような背景を考慮すべきなのかも知っている。

『ティアニー先生の診断入門第2版』は通読も容易だ。しかし、ここに記されている大切なことを、本当に理解できる日は、さらなる時を経た後であることも感じさせられる。

そのことを確認するためにも、数年後に再読したいと思わせる魅力に満ちた書籍である。

A5 頁208 2011年 医学書院刊
定価3,150円（本体3,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-01440-3]